

街のオアシス再発見

第1回



都心の人気エリア

大通公園「西1～5丁目」(札幌市)

森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを勤め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」

人口195万人の大都市・札幌。その都心部を東西に貫いているのが大通公園です。西1丁目から12丁目までの全長1.5^{km}。開拓使が設けられた当初、この通りを火防線とし、北側を官庁街、南側を商店街、住宅街に区分しました。

防火用の空き地が公園として整備されたのは1909年から1911年にかけて。造園の第一人者、長岡安平の設計により、植栽をするなどして「逍遙地^{しやうようち}」にしたのが始まりです。

緑がまばゆい春から夏、紅葉の鮮やかな秋は、市民や観光客の憩いの場となっています。中でも駅前通を挟んだ西1～5丁目は、地下鉄などの交通の便がいいことから、訪れる人が多い人気エリアです。



市民らが憩う大通西3丁目

5月は「リラの花咲く頃」

サクラの開花は温暖化の影響で年々早まり、大通公園では最近、4月下旬から花が開き始めます。同じ土地で日当たりなどの気象条件が同一であれば、一番早く咲くのはチシマザクラ。その後、エゾヤマザクラ、ソメイヨシノの順に開花します。

チシマザクラは千島列島に多く見られることから付けられた名前です。葉の縁のギザギザ(鋸歯^{きょし})が深く



咲くのが早いチシマザクラ

※散歩などをする所。



甘い香りを放つライラック

二重になっているのが特徴です。幹は根元から分かれ、枝が横に広がり、高木になりません。西3丁目北側にある木も見過ごされがちです。

サクラの開花を実感するのは、あちこちに植えられているエゾヤマザクラが色づいてから。西1丁目のテレビ塔の下ではソメイヨシノが咲きます。

次いで5月中旬に花開くのがライラックです。「札幌市の木」だけに、公園のいたるところに植栽されています。この時期はライラックまつりが開かれ、本格的な春の到来を感じさせます。

ライラックは英名で、和名はムラサキハシドイ。北星学園の創設者スミス女史が1890年に米国から持ち込み、学園内に植えたのが始まりといわれています。英名が浸透していますが、渡辺淳一の小説「リラ冷えの街」の影響から、仏名のリラとも呼ばれます。

同じ仲間のハシドイは、枝の端に花が集うように咲くことから「端集い^{はしつどい}」が転じたという説が有力です。ライラックも枝先に花をたくさん付けます。主に紫色ですが、白色の方が一足早く開花します。

甘い香りが漂い、近くを歩いているだけで花の存在に気づくほど。香りの成分であるライラックアルデヒドは、受粉のために呼び寄せる虫の種類を決める働きがあることが分かってきました。そんなことを考えながら鼻を近づけると、魅惑的でしたたかなにおいに思えてきます。

宝塚歌劇団がよく歌う「すみれの花咲く頃」は元々ドイツ語の曲で、フランスでは「リラの花咲く頃」というシャンソンでした。それを日本で紹介する際、リラはなじみがないため、すみれに変えてしまったのです。

かつては日本のシャンソン歌手も「リラの花咲く頃」を歌っていましたが、残念ながら今では「すみれの花咲く頃」がすっかり定着してしまいました。「リラの花咲く頃」がもっと知られていたら、この季節を象徴する札幌市民の愛唱歌になっていたかもしれません。

歴史伝えるハルニレ大木

西1丁目の北隣にあるカナモトホール(旧市民会館)前には大きなハルニレが立っています。樹高24m、直径1.2m、樹齢約300年とされ、樹木では唯一、「札幌



都心に残るハルニレの大木



駅前通を彩るトチノキ

景観資産」に指定されています。別名エルム。札幌を代表する自生木です。その木について、有島武郎は小説「星座」で次のように書いています。

「エルムは立っていた。独り、静かに、大きく、淋しく……大密林だった札幌原野の昔を語り伝えようとする者のごとく、黄ばんだ葉に鬱蒼と飾られて……園はこの樹を望みみると、それが経てきた年月の長さを思った。その年月の長さがひとりでにその樹に与えた威厳を思った。人間の歴史などからは受けることの出来ない底深い悲壮な感じに打たれた」

この作品は札幌農学校の学生が主人公で、有島自らが学生だった1900年ごろを描いています。ハルニレがある場所はかつて豊平館（1958年中島公園に移築）の庭でした。120年以上前からすでに威容を誇っていたことが分かります。変遷する街を見つめ続けてきた大木。近寄ってみると、幹は一部空洞化しており、その老いた姿は風雪に耐えた歴史の重みを感じさせます。

西3丁目と4丁目の間にある駅前通には、トチノキが植えられています。5月下旬になると、白い花が円錐状になって咲きます。遠くから見ると、クリスマスツリーのような華やかさです。パリの街路樹として有名なマロニエも同じ仲間です。

葉は7枚前後が手のひら状に広がって付くのが特徴。花が枯れても、葉を見ただけでトチノキだと判別できます。秋になると球状の実がたくさん付きます。

「テレビ塔」だったのは12年間

西1丁目の「さっぽろテレビ塔」(147m)は、時計台と並ぶ札幌のシンボルです。1956年のテレビ放送開始を前に、市や商工会議所から持ち上がったのが、電波の送信所と展望塔を兼ねた施設を大通公園に建設する構想でした。モデルとなったのは1954年に完成した「名古屋テレビ塔」です。

NHKは名古屋のケースを踏襲し、計画を支持します。しかし、HBCは電波を広い地域に届けるには手稲山山頂に設置するのが望ましいとして、事業への不参加を表明しました。結局、話し合いはまとまらず、



札幌のランドマーク、テレビ塔

平地方式と山頂方式で準備が進みます。

こうした不統一が全国に波及することを懸念した郵政省（現総務省）は、札幌を含む全国6地区を山頂方式とすることに決定しました。

ただし、札幌のNHKは当面、テレビ塔を使うことで放送が認可されました。NHKは1956年12月、HBCは1957年4月に開局します。

STVは開局が当初予定より早まり1959年4月となったため、将来の手稲山移転を条件に、テレビ塔を送信所にすることが認められます。

NHKは1962年6月、STVは1969年1月、それぞれ手稲山に送信所を移設しました。テレビ塔が本来の業務を担ったのは12年1カ月。その後は、名称を変えることなく展望塔として札幌観光に寄与してきました。

一方、名古屋テレビ塔は2021年、会社名は変わらないものの、塔の名前を「中部電力 MIRA I TOWER」に変更しました。このため、テレビ塔と名が付くタワーは全国で札幌だけとなりました。

不仲だった2人の歌碑

西3、4丁目に二つの歌碑があります。西3丁目には石川啄木の銅像とともに「しんとして幅広き街の秋の夜の 玉蜀黍の焼くるにほひよ」の歌碑が立っています。啄木が札幌の新聞社に勤めていた1907年当時の様子を詠んだ作品です。



石川啄木の歌碑

西4丁目にある歌碑は吉井勇の「家ごとに リラの花咲き札幌の人は楽しく生きてあるらし」です。1955年に札幌を訪れた際、旅の記念に作歌しました。

実はこの2人、生前面識があったのです。1909年に創刊された文芸誌「スバル」の編集に携わっていました。同じ志のはずが、いつしか疎遠になってしまいます。

啄木の日記には「予は近頃実に吉井がイヤになった」「吉井は鬼面して人を嚇す放恣な空想家の垂流——最も哀れな垂流だ」（「啄木全集 第六巻」）など辛辣な表現が目立ちます。

一方、あの啄木があきれれるほど荒れた生活をしていた吉井は「編集者間に異見を生じ、その間が如何もしくつくりとゆかないやうになった」（「吉井勇全集 第七巻」）と回顧しています。

ただ、早世した啄木の自宅で「粗末な棺」を目にし、「寂しい死後の姿を見ると、私はただ暗然として亡き友の霊前にぬかづかすにはゐられなかった」（「同 第八巻」）とも言っています。

啄木碑は南、吉井碑は北を向き、対峙するかのようになっています。興味深いのは、不仲だった2人の歌碑が期せずして1981年に建立され、啄木はトウモロコシ、吉井はライラックを題材にし、札幌の観光PRに一役買っていることです。



吉井勇の歌碑